

此續の斯もさうさう的切末の結るいふんを
顔むであぐらふ違ぬ長通勞して切る
然る光の清くも言唯く世根評
判の唯可吟うぬと嘆うのこも多難ぞ
後をも馬ふま縷も一妻花違の珍業
あふ目さぬも換る再心さふ勢ぬぬまの

新板のと又評判をひる古事わごと
自惚發動鼻山人阿王の池の二編を
素生らの燈のふまを採聲を歎く
云爾ららるの如

丙申まき 東里山人誌





七五八八八



更々
聞く
池や
鴨
石

相州荻野
杉林舎有竹



神田 阿玉が池三編上巻
雑 誌

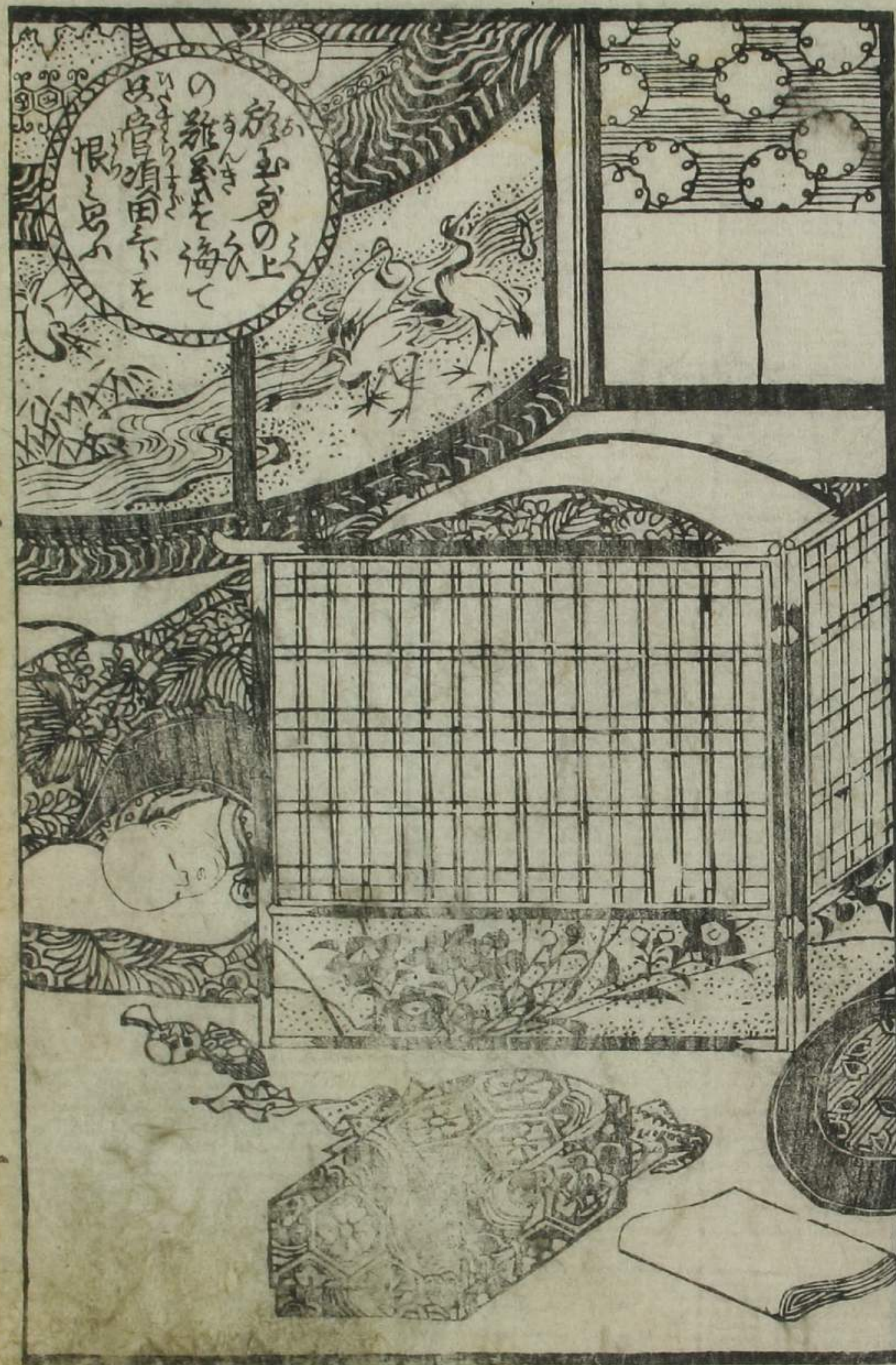
鼻山人者

七 譚

去て再反故らるるの要途送中の列は後海を惟ふ同
 なるも聞かぬ他ありたりと神田の池三編上巻
 位牌の傍にありて見えて其利を為さざる奴ら
 熱傷の網を借入せしむるも悪徳の心ならずも
 して出たる道まがらも今のおどが音なり昔は実なる

何とも合点致すと押のひあつらふらう池のほうまでまうら
 ちの住者の片よらふ細き竹のたけ入携するも紙ありあけ
 られ住者の人の落しるを携したる者の影のどくくとはあ
 立ち並ぶものあんと信ふは是なる 毒めとのあま もとく 且好さぬ
 らる上におが神田を子代まき及巴を内とらひあつ竹のたけは
 てまぎらふますぐたつあまこのあつるやうとらひ道に携し
 らるまする子代まき あつる 神田を子代まきとあてあれが某が
 及るなるあまのせい巴を内とあつ一向に道うがあまあま

知る名も廣くいけ江戸のりきあれが妙あめあつらうや井
 らくさうあつらふますらうらふ半端の内張詰あつら
 密におあつらふます子代まき あつる 神田を子代まき
 あれと子代まきとあつ某一人 あつる 神田半端の内張詰あつら
 らるあつら巴を内張詰あつらあの中をえらふ分てあつら
 ありしあつら あつら 須田うら あつら 持越の三日酔ひ一膳の
 子まがぬしあつ あつら 今夏の中におあつらあつらあつら
 年頃の あつら 内張詰あつらあつらあつら あつら 一す あつら 執



由らむとていひては、
通つたは、
留ら島田の、
ませんと恨の、
お入抱の、
中しがおつち、
童とあや、
落しは、
らぬあ、
まを、
早、
成、
あ、
の、
た、
た、

由らむとていひては、
通つたは、
留ら島田の、
ませんと恨の、
お入抱の、
中しがおつち、
童とあや、
落しは、
らぬあ、
まを、
早、
成、
あ、
の、
た、
た、

まろひもれも推ゆア、^{まろひ}まろひもれも推ゆア、^{まろひ}まろひもれも推ゆア、^{まろひ}
死んでう丸目をもるねづ^ま死んでう丸目をもるねづ^ま死んでう丸目をもるねづ^ま
羈うされし女子の料^ま羈うされし女子の料^ま羈うされし女子の料^ま
縋ひて傷る雛系を^ま縋ひて傷る雛系を^ま縋ひて傷る雛系を^ま
あの一毒うめをせめんの^まあの一毒うめをせめんの^まあの一毒うめをせめんの^ま
一とまてあられろ^ま一とまてあられろ^ま一とまてあられろ^ま
あの日くら且^まあの日くら且^まあの日くら且^ま
嘯く^ま嘯く^ま嘯く^ま

事と難れともあま^ま事と難れともあま^ま事と難れともあま^ま
ず取ぬあのおま^まず取ぬあのおま^まず取ぬあのおま^ま
一と^ま一と^ま一と^ま
命の^ま命の^ま命の^ま
ま^まま^まま^ま
あ^まあ^まあ^ま
あ^まあ^まあ^ま
あ^まあ^まあ^ま



巾を押分けては湯をよじ女の死骸をさらきあつてはけり
 揚子もさうもあはれなげやせん角やとらうくふをを
 さるるにあらあつ合ふ茶店の標を看とれ亮亮の袋あ
 一袋をさしゆき送らんとあはれ入るる夜行の標を
 念ふに死骸をこれとて茶店の標を引上りて揚子
 ともなひ夜月をみるもあはれなげやせん
 自らも実をたもたせたる子あはれなげやせん
 今更に夜の明をぬらふもあはれなげやせん

更直くお直付をさきのきりお細布のきねまで目をあま
 来りてこれいそ死なれとてお細布のきねまで目をあま
 考ふに一番と破腰の御の上より履着を脱ぎて死
 骸を這へてお直付をさきのきりお細布のきねまで
 月をさのりてあはれなげやせんお直付のきねまで
 考ふに一番と破腰の御の上より履着を脱ぎて死
 骸を這へてお直付をさきのきりお細布のきねまで
 介抱あはれなげやせんお直付のきねまで
 まるるお直付をさきのきりお細布のきねまで

御顔の薬

押し強心仙女膏

多量を知りて

熊星油

如

東里山人

御
顔
の
薬

